交流

〈大会発表要旨〉

◆和田英信　金陵をうたう王安石　都市をうたう詩の特色として指摘できることは、語り手あるいは主人公として喚起されるのがしばしば旅人であるか局外者であること。そしてしばしば「古」と「今」が対比され、古今の隆替に対する慨嘆が投げかけられていることだ。

旅人・局外者の視点から発せられる、都市の衰廃に対する詠嘆。たとえば唐人の「金陵懐古」、それは一見すると「今」に軸足を置き、かつての華やかなる都金陵の「古」を想うというように思われるが、その実、詩人の「今」、そして「古」は、その詩人にとって固有の「今」「古」では必ずしもない。というのもそこに流れる情調は、不変の自然と人事の無情を対比するという、都市をうたう文学に普遍的に見られる感懐にほかならないからである。それは旅人ならではの情懐であり、それ故にまた、甘やかな感傷をともなって時代を超えて多くの旅人に共有される。

一方、江寧（金陵）に住まう生活者としての王安石は、過去の人々がこの地に遺し、刻んできた歴史の一齣一齣を思い、その事のこの場に行われたことを、あたかも自らの目で見、手触りとして確かめるかのように詩に詠み込む。またそうすることによって、土地のもつ歴史的な豊かさをいつくしみ、今この場に生きる自らの生をうたおうとする。王安石の詩にもまた従前の詩と同じように「古」と「今」を対比する視点が見いだされるのだが、王安石詩の「今」とは、彼にとっての掛け替えのない固有の「今」なのである。

◆橋本陽介　中国語における「流水文」の研究　中国語の書き言葉を読んでいたり、翻訳をしたりしていて、「なぜここが読点でつながっていってしまうのか？」と思ったことはないだろうか。句点で区切っても読点で続けてもよい場合が少なくない。なぜそのようなことが起こるのだろうか。

その根本的な要因は、比較的独立した節が次々に付加される形で展開し、「一つの文」が形成されていることが非常に多くあるからである。本書は中国語書き言葉（特に小説言語）に多く登場する長くて複雑な「一つの文」を言語学的・修辞学的に明らかにし、ひいては言語における「一つの文」について中国語書き言葉の観点から考察をしようとするものである。「一つの文」はしばしば「一つの思考を表す」とされる。中国語書き言葉において、句点から句点までで伝達される内容がもし日本語や英語などと異なるとするならば、何をもって「一つの思考」「一つのまとまり」とするかが異なるということになる。ではそれはいったい何なのか。もし違うとすればどのように違うのだろうか。

本発表では、二〇二〇年に出版した『中国語における「流水文」の研究』の概略を紹介した。

〈例会発表要旨〉

◆大西由美子　民間文芸に継承された「舜子変」と、そこから探る「舜子変」の欠損部について　敦煌文献の「舜子変」

は、広西や福建の説唱や演劇等の形で残されていることが近年分かってきた。先行研究では、後部のない鈔本S.4654と前部の欠損したP.2721vを合わせて「舜子変」の底本としているが、これと福建の説唱『大舜耕田・坐天歌』、広西の師公戯『唱舜児』、採茶戯『舜児記』及び広西壮族師公戯「舜児」を比較すると、あらすじ及び表現から、「舜子変」を継承していることが明らかである。特に採茶戯抄本『舜児記』には、S.4654とP.2721vの間の欠損した部分、つまり継母が父に讒言した舜との出来事の真実が描かれている。『唱舜児』や『舜児記』は葬礼の際に演じられ、その中には他の孝子の名も見られることから、舜等の孝子説話を棺に描いた北魏の頃から現代まで、「孝」が死者を葬る際の重要な事柄として受け継がれ、その中で「舜子変」が口承文芸の形で残されてきたと考えられる。

◆董子華　謝朓詩における「慕帰」とその場所　謝朓の詩において、「思帰」や「慕帰」などの表現が屢々に見られている。詩の創作時期と謝朓の官界生涯から見ると、これらの詩は彼の荊州赴任時期と宣城赴任時期に集中している。謝朓は荊州から都に帰還した後、一連の政治闘争を経歴し、心境には大きな変化が起こった。故に後の宣城太守時期に創作された詩作では、慕帰・望郷の思いには隠遁への憧憬が纏められ、定型化された抒情になっている。また、謝朓の生まれ育った土地は建康、すなわち南朝の都の周辺と想定されているため、彼の「慕帰」には京都帰還という政治的な願望も示していると認められている。本発表は、荊州・宣城という二時期の詩において、慕帰・望郷の思いをどのように表現しているのかをそれぞれに考察した。前者では、景物の在り方を動態的に捉える技法を用いて、遥かに隔たる故郷を異郷に滞在している旅人と結びつけ、直接で強烈に思帰の願望を表している。一方、後者では、目の前の景物をより静態的に描写することによって、慕帰の空間に沈鬱で収斂的感覚を与えている。しかも、このような無限な空間へ視線を投げる姿勢は自分の内面を掘り込めることにつながっている。また、宣城時期に作られた敬亭山に関する一連の詩への考察によって、謝朓の慕帰の場所の有様を論じた。敬亭山は彼の真の帰りたい場所、即ち「郷」ではないが、仕官（祝祭）と隠棲（遊覧）の両方が実現できるため、異郷に滞在する謝朓に理想的帰るべき場所の一つのモデルに見做しているのではないかと考えられる。

◆陳坤　明代の四川における提学官の実績について　提学とは中国近世において中央朝廷より地方に直接派遣され、行政区域の学事の管理・監督を司る官職を指す。明代の正統元年（一四三六）に専任官員として、提学官が設置された事が明代の提学官制度の始まりとされている。明代の提学官制度に対して、従来の研究では、提学官の基本的な職務に重点が置かれており、各地域に派遣された提学官たちが、各地方で具体的にどのように文教活動（教育と文化に関する活動）を展開したかについてはまだ注目されていない。

本発表では、明の提学制度の設置と沿

革を明確にし、明代の提学官の代表のひとつである四川の提学官を取り上げて、かれらの任職状況及び文教活動の実績について考察し、明代の提学官制度の具体像を明らかにすることを目指した。

明代の四川において、合計七十二名の提学の官員が任命された。地方の教育管理の最高長官として四川に赴任した彼らの活動は、地域における文教の様々な方面に及んでいる。本発表では主に、①四川の府州県の官立学校の設立と建設②四川書院の創立及び講学③四川における督学条約の制定と人材の選抜④四川の地方誌の編纂という四つの方面から、かれらが四川の文教に積極的に貢献した実績が確認された。その中でも特に、明代『四川総誌』の三度の再編に取り組んだ官員たちの姿は目立っている。そして万暦時の提学官郭棐による『四川総誌』の校閲及び四言詩の『四川総誌』序文の作成の事例から、提学官のような知識人は、当時の地方教育行政の担当者であるのみならず、文学、文化の担い手としての優れた文学的素養が見られる。

◆潘一嵐「拉壮丁」から見る沙汀一九三一年―一九四九年の小説創作

四川出身の左翼作家である沙汀は、一九三一年に文学創作を始めてから、一九四九年中華人民共和国建国まで数多くの小説作品を書いた。これらの作品は主に暴露、諷刺の手法で国民党の反動政策を摘発し、四川の現実社会を反映するものである。その中、「拉壮丁」（強引に壮丁を参軍させる）という現象は重要なモチーフとしてしばしば沙汀の小説に書かれている。具体的には、『凶手』（一九三五）、『在其香居茶館里』（一九四〇）、『替身』（一九四五）、『呼嚎』（一九四五）、『蘇大个子』（一九四六）などの小説が挙げられる。

今回の発表では、同一モチーフにおける異なる語りを分析する視点から、上記の同じ「拉壮丁」を手がかりにして四川社会の暗黒を暴露した小説で、沙汀の創作方法にはいかなる変化があったか、作家の創作特徴が「拉壮丁」の叙述にどのように反映されているかを考察し、沙汀の建国前の創作個性を明らかにすることを試みる。

◆阿部沙織　凌叔華『中華児女』の日本人表象を再読する：松岡洋右との交流を参照軸として

本発表では、まず二〇二一年に刊行された陳烈『雙佳樓往事――時代風雲中的陳西瀅與凌叔華』（中華書局(香港)有限公司）で初めて公になった松岡洋右の凌叔華宛て書簡について、同書著者の書簡に対する評価を含めて紹介した。満鉄理事や外相を歴任し、のちにA級戦犯と判じられる松岡洋右と凌叔華の交流については、慎重かつ客観的な調査がさらに必要である。それを前提として、凌叔華の日本表象についてはこの事実に基づいての再読が可能であると考えられる。再読への一歩として、本発表では凌叔華唯一の中国語中編小説で抗日をテーマとする「中国児女」（一九四二年）を中心に取り上げ、上掲書で明らかにされた松岡との交流を参照しながら、主人公の少女を手助けする人情味溢れる日本人憲兵像等の再考に値する表象をいくつか指摘した。非常に初歩的な分析にとどまった発表であったが、

フロアから「表象」というタームの扱い方や、松岡研究では中国人との関係はどのように扱われているか、また凌叔華の複雑な抗日感情などについて有益なご意見やご指摘をいただけた。感謝申し上げます。

◆呉優美子　杜甫詩における混沌への憧憬　杜甫詩は、同時代の李白詩に比して、実際の現実に即して在るとして、確と論じられてきた。そしてまた杜甫詩には、不可知のものを表現しようとしている側面もあり、それは現実を超えた光景、非現実的なものと受け取られている。

杜甫は、現実の、眼前に在るものを信頼し忠実に再現する。それは不可知なものに対しても同様である。本発表では、不可知なものが明示されている杜甫詩を取り上げながら、杜甫による創造の試みについて考察を行った。

杜甫はまず、漠然とした捉えどころのない万物の源泉、混沌に接触することへの志向を有していた。中国においては古くから、「天」すなわち「造化」が世界の創造者であり、こうした人知を超えた者が世界を創り出したと考えられていた。「造化」という創造者のように、始原の状態、また万物の無秩序の状態といった不可知なものに立ち会うことが、杜甫にとっての創作の秘訣であった。

杜甫は、ことばによって新たに世界を創造する試みに基づき、現実を超えた世界を立ち現しているというよりも、実体験・目にした事実でもって、不可知なものを構築することにつとめている。杜甫は、実際に体感した不可知の領域を記し、表現しているのである。現実に目にした不可知な事実に即してことばを紡ぎ、杜甫自身が造化と同等の、人知を超えた超越的目線を有していること、ひいては造化の立ち位置を脅かす要素（不可知なものに向き合い、見つめることができる）を持ち合わせていることを示している。

無論、杜甫は造化に畏怖の念を抱いており、そのために自らの無力さを実感することもある。ただし、造化の罪を露呈し、自らの力量でもって造化に対抗しようとしていたこと、加えて不可知の世界を見つめていたことを鑑みれば、杜甫が、造化に成り代わり、創造していく試みを行っていた、といっても過言ではないと考える。

◆水津有理　批評語としての「不可解」――明末清初の詩的言語論における一考察　明・謝榛の「詩に可解、不可解、不必解有り、水月鏡花の若し、其の迹に泥む勿れば可なり」ということばに代表されるように、明代詩学とりわけ復古派の詩論詩評にしばしば「不可解」の語、あるいは「詩の妙は可解不可解の間に在り」などの表現が用いられることはつとに指摘があり、その概念の由来は明代詩学に大きな影響を与えた南宋・厳羽『滄浪詩話』の「興趣」を重んじる詩学にあるとされてきた。一方、「不可解」の語についてはもう一つ目立つ事象がある。それは、杜甫の詩、あるいはその特定の表現や用字についてしばしば発動される語であるという点である。格調派を批判した竟陵派の杜詩評のなかには「可思而不可解」「用得不可解、妙」「解不得、有至理」などの評語が散見され、杜甫の用字のなかに「不可解」のものがあるとの

指摘、またそれを高く評価する態度が窺え、明末清初の黄生は竟陵派のこうした態度について南宋・劉辰翁の杜詩評中にみえる「語至不可解則妙」に由来するものと指摘する。発表ではこれら「不可解」の語の批評語としての系譜をたどり、その含意するものについて、またその語が「詩を詩とするものは何か」という問いに対してどのような意味をもつかについて、初期的な考察を試みたものである。

〈博士論文要旨〉

◆趙美子　風流たる濁世の佳公子―詩に見える曹丕と曹植―　本論文は、歴史記載や先行研究を整理しながら、曹丕と曹植の詩における公宴・閨怨・遊仙という三つのジャンルについて論述するものである。第一章では、曹丕と曹植の関係に関わる記載や作品を建安・延康・黄初時代に分けて分析し、彼らの関係に起伏があったとしても兄弟の情愛は一貫していたという結論を出した。第二章では、建安年間の公宴詩について分析した。建安公宴詩はすべて同時期の作品とは限らず、少なくとも時期や場所の異なる四回の宴会に関して詠われたものであると考えられる。第三章では、曹植の閨怨詩について分析した。棄婦詩に詠われた相手の裏切りによる別れより、思婦詩に詠われたやむを得ない別れこそが黄初年間における曹丕と曹植の関係の実態に近いと言える。第四章では、曹植の遊仙詩について分析した。特に「鼎湖」の典故を用いた三首の遊仙詩には、亡き曹丕への殉死の意思が捉えられる。以上を通じて、詩人としての曹丕と曹植の生涯にわたって絶えることなき絆に対する理解をより一層深め、彼らの関係に対する叙述に新しい印象や語り方を提供することを期待する。

◆林如　中国語におけるアスペクトマーカー〝了[1]〟の焦点化する機能に関する研究　従来の中国語文法研究では、〝了[1]〟の意味機能に関する研究が多くなされてきた。〝了[1]〟の意味について、多様な解釈がなされているものの、統一されず、〝完成説〟・〝実現説〟・〝完整説〟などが挙げられる。本研究は、〝了[1]〟にはアスペクトの機能以外、焦点化する機能もあると主張する。〝了[1]〟のアスペクトの機能は、戴耀晶（一九九七）の〝完整説〟（完結相）を基盤とした。〝了[1]〟の焦点化する機能について、音韻の調査を行い、ピッチの変化、発音の伸長時間及びインテンシティの3つの要素を考察した。音韻の特徴により、〝了[1]〟を伴う動詞句は文の焦点部分に当たり、〝了[1]〟に焦点化する機能があるということも分かった。また、本研究では、刘勋宁（一九九九）に基づき、〝了[1]〟の焦点化機能及び他の焦点化演算子〝只〟、〝连〟との区別を考察した。これにより、〝了[1]〟には、焦点を提示するという焦点化演算子としての機能があることを明らかにした。

〈修士論文要旨〉

◆呉越　半植民地都市におけるアイデンティティーの混乱――穆時英（ぼくじえい）の「ピエロ」を中心に　穆時英（一九一二～一九四〇）は中国新感覚派の作家である。「ピエロ」（原題：「Pierrot」）は初め「現代」第4巻第1―6期（一九三四年）に掲載され、その後は「公墓」に収録された小説である。穆時英は主人公の潘鶴齢の孤独、無力感、彷徨、悩みを描

出している。本稿はテクストを分析し、当時の雑誌新聞の文章や画像を引用し、ポストコロニアリズムとジェンダーの視点で、潘鶴齢のアイデンティティーは如何に混乱していたか、および混乱の理由を明らかにしたい。

現代社会に活躍しているモダンガールは、男性の絶対的な支配を打破し、ある程度マスキュリニティを弱化した。中国新感覚派の作品における都市男性は、モダンガールに対して、焦慮や不安を抱いている。

半植民地の苦境により、一部の中国人に民族的な劣等感が生じた。そのため、半植民地中国より強い日本の国民である女性琉璃子と交際する時、潘鶴齢は卑屈で、自分が捨てられることを心配している。

そして都市部・農村部の間の人口移動は、家庭の形式を変化させた。このような変化に対して、潘鶴齢は自分のマスキュリニティが弱化したことをさらに感じて、アイデンティティーも更なる混乱をしていると考えている。

本稿の論証により、半植民地という複雑な歴史時期における男性のアイデンティティーの混乱の原因を回答することが可能になるはずである。

◆趙芷苑　現代中国語語気詞の疑問文末用法――〝呢〟〝啊〟を中心に　語気詞は虚詞であり、単独で意味を有さないという特徴があるため、疑問文末における語気詞の意味については研究者の間でまだ一致した見解がない。そこで、本稿では、現代中国語語気詞の疑問文末用法を明らかにすることを目的とし、主に北京語言大学言語知能研究院のBCC中国語コーパスと北京大学中国言語学研究センターのCCL中国語コーパスを用いて語気詞が使われている疑問文を検索し、収集した上で、文のタイプと疑問素性に基づき、収集した用例を帰納的に分析した。

本稿では、疑問文末によく現れた語気詞〝呢〟と〝啊〟を研究対象とした。まず、語気詞の定義と分類を明らかにした。次に、語気詞についての先行研究を紹介し、その問題点を明らかにした。そして、分析の枠組みを説明し、疑問文の分類と生成文法における疑問標識を紹介した。また、先行研究に基づき、例文の分析を行い、典型語気詞〝呢〟と〝啊〟が異なる疑問文に使われる時に、それぞれ疑問の意味を表すのか、そして、疑問の意味を表していない時は、どのような言語機能を持つのかを考察した。最後に、現代中国語語気詞の疑問文末用法をまとめ、考察した。

◆李可馨　二十世紀二、三〇年代における中国女性同性愛の性的描写――郁達夫『她是一个弱女子』を中心に　二十世紀二、三〇年代の中国においては女性同性愛の性欲に対してどのような観点が持たれていたのだろうか、また、女性同性愛のテクストはどのように描かれていたのだろうか。本研究は「同性愛」概念の浮上に着目し、言説としての女性同性愛の性欲がどう語られたのかを明らかにしようとする試みである。当時の学界では同性愛の性欲の存在を認めないとの見方が広がり、同時期の女性同性愛の性欲描写を描いたテクストにおける性的描写を避ける創作姿勢を明確にした。その中で、

郁達夫『她是一个弱女子』における露骨な性的描写を研究対象とし、日本から受容した「第三性の女性」をめぐる言説と合わせ、当時の女性が男性の特徴を模倣して性の主導権を得ることによって個体の自主権を獲得することを示し得ていることが分かった。また、郁達夫の経験と合わせ、女性性欲の不可視化の社会背景に合わない露骨な性的描写が生まれた成因は今後の課題にしたい。

◆李嘉玥　李賀詩における神仙の存在状態　西王母のイメージをめぐり　本研究は李賀詩の時間の循環性などの先行研究を踏まえ、西王母という神仙イメージを巡って、李賀詩における神仙の存在状態の考察を行った。

まず、本稿では「神仙」の概念を検討し、最も知られている「不老不死」と「常人に超えた特殊能力」の二つの特徴で広義的に神仙に定義を付け、研究対象の範囲を定めている。第二に、西王母のイメージは古典文学に頻繁に登場し、李賀の詩歌にもよく使われていることを述べた上で、西王母を研究対象に設定して検討する。

李賀の作品を考察すると、中に西王母のイメージに関わっている詩は六首あると分かる。そこで、まず「河南府試十二月楽詞」の「閏月」・「瑶華楽」・「神仙曲」・「崑崙使者」の四つの詩をそれぞれ比較分析し、神仙の出現は偶然性があること、神仙の存在は現実ではなく概念的なものに近いこと、神仙の存在状態は「不在」であること、という三つの結論に辿り着くことができた。その後、残された「浩歌」と「仙人」の中の、西王母と関係深い桃の花のイメージを分析し、仙人の存在状態の曖昧性を、さらに確認することができた。

本稿は西王母のイメージだけに検討を行ったが、李賀詩における神仙の存在状態の問題を提出し、その存在状態の特徴をまとめて結論をつけることができた。今後の課題として、「神仙」の概念をより詳細に掘り下げて分類した上に、より多くの種類の神仙のイメージを検討することを通し、李賀詩における神仙の存在状態の研究を補充していきたいと考える。

◆陸予婷　盛唐辺塞詩について―色彩を中心に―　本稿では、盛唐辺塞詩の色彩を中心に、色彩の割合および使用頻度についての統計結果を踏まえ、色彩が具体的にどのように使われているか、詩にどのような気質を与えているかを考察する。

第一章は、先行研究、辺塞詩の概念、色彩の分類と含意を説明した。唐において、「辺塞」は主に突厥と吐蕃と地続きでつながっている地域を指し、異民族すなわち外敵と緊密に関連する。

第二章は、岑参、王昌齢、高適に対して色彩の詳細な統計を行い、客観的な色彩特徴および配色傾向を明確にした。三人の愛用する直接色彩には大きな差別が見られる。間接色彩については同じ傾向を示す。一首の詩における配色については、岑参は大面積無彩色＋小面積有彩色を愛用する。王昌齢は色彩の平衡を追求しバランスの取れた黄＋白という配色が特徴的である。詩に重厚で穏健な気質を与える。高適は配色に工夫を凝らしていなく、渋くて控えめの色彩運用が詩に厳

かで悲壮な気質を与える。対句の配色については三人とも黄＋白を愛用する。青＋白も比較的多い。

第三章は、詩人の間における比較を行い、盛唐辺塞詩における色彩運用の全体像を分析する。直接色彩の使い方は大きく異なるが、間接色彩の類似した比例配分、素朴な正色の頻繁な使用、類似した配色傾向という共通点を通じて、作風上の統一を達成した。色彩運用の造詣については、岑参、王昌齢、高適という順番になる。また、唐人は広闊を追求するという時代性格を持つ。辺塞詩の色彩運用もこの性格を示し、広大な色彩空間を形作る。寒色がその基調で、常に暗くて濁った様である。

以上の色彩特徴を通じて、辺塞詩の雄渾で悲壮な風格と特徴を強化できるだけでなく、重厚かつ穏健な気質も与えることができる。